

発行人 ● 杉浦賢次 / 編集人 ● 蒔田純司

東京都港区芝浦3-2-22田町交通ビル2F / TEL(5444)0510 / FAX(5444)0303 / <http://www.rengo-tokyo.gr.jp/>

3つの日本記録をもつ リオ・パラ陸上銅メダリスト

パラ陸上競技

たがわ と も き

多川知希さん

東京電力
ホールディングス(株)

パラ陸上で3つの日本記録保持者である、スプリンターの多川知希さん。大学院生として初出場した北京パラリンピックから数えて3度目となった2016年リオデジャネイロ大会の4×100mリレーで、念願のメダル獲得を果たした日本を代表するパラアスリートの一人です。東京2020大会で新国立競技場のトラックを疾走する自らの姿を目標に、仕事と競技活動の両立を継続する多川さんにインタビューしました。

(インタビュー担当：連合東京副事務局長 蒔田純司)

過去の自分と勝負できるのが 陸上競技の奥深い魅力に

——多川さんと陸上競技との関わりは中学生の時からと、お聞きました。どのような出会いがあったのでしょうか？

多川 ●部活動で陸上部に入ったのがきっかけですね。当時はランニングよりフィールドの投てき種目が面白くて、高校まではやり投げや砲丸投げなどをやっていました。一応リレーメンバーにも選ばれていたので、短距離走の練習にも取り組みました。高校の陸上部は毎日一生懸命活動する部でしたが、私はインターハイなどに出場できるようなレベルの選手ではなかったので、陸上競技に対する想いは今ほど強くなかったかもしれません。でも毎日楽しかったですね。

もっと幼い頃の自分は、落ち着きがない子供で、小学校時代の通知表には担任の先生から「掲示係になってくれましたが、何をする係なのかよくわかっていない様子でした」と書き込まれたことをよく覚えています。中学校までは喘息もちでケガも多く、頭部に裂傷を負って手術を受けるなど入退院を繰り返すようなこともありました。

そんな私が陸上競技に興味を持ち続けてこれた理由は、物差しや時計で測る数字によって、過去の自分と勝負ができること。過去と比較しながら自分のベストをわかりやすく認



2017 ロンドン世界選手権リレー

多川知希さん PROFILE

パラ陸上競技短距離選手 / T47 クラス (上肢切断など)
100m、200m、4×100m リレーのT47 日本記録保持者
東京電力ホールディングス(株)
東京オリンピック・パラリンピックプロジェクト総括室 勤務
1986年2月、横浜市瀬谷区生まれ。生まれつき右前腕部が短い障がいがある。
神奈川県立希望ヶ丘高校～早稲田大学理工学部～同大学院修士課程修了。陸上クラブ「AC・KITA」所属。
中学校時代に陸上部に入り競技生活をスタート。中学・高校時代は投てき種目を中心にリレーチームにも参加した。大学入学後は一時競技から離れたが、2005年から現在の陸上クラブに所属し短距離走主体に活動を再開。大学院初年次に2008年北京パラリンピックに出場。以後、ロンドン、リオデジャネイロ大会にも連続出場し、リオの4×100mリレーでは3走を務め、見事銅メダルを獲得。東京2020大会では4度目のパラリンピック出場をめざしている。

パラリンピック大会の主な戦績

2012年 ● ロンドンパラリンピック
: 100m = 5位 / 4×100m リレー = 4位
2014年 ● 仁川アジアパラ
: 100m = 銅 / 200m = 銅 / 4×100m リレー = 金
2016年 ● リオデジャネイロパラリンピック
: 100m = 出場 / 4×100m リレー = 銅



レース前、精神集中 (2013 リヨン世界選手権 100m)

識できる点にあります。努力の成果が正確に反映されるところや、ほぼ一瞬にして勝敗が決着するところも好きですね。

——その後大学に進学されましたが、理系の学部に通いながら競技活動も続けられたのですか？

多川●大学進学後は陸上のサークルには所属せず、しばらくの間は家と大学を往復するだけの毎日を送っていました。勉学最優先というほど力んでいたわけではありませんが、通学に時間もかかるし、大学生活のリズムに慣れるのが大事だという感じで。そんな私を見ていた母親が「高校まで陸上やっていたんだから、今度はパラリンピックの世界で陸上してみたら？」と勧めてきたんですね。

「(あまり知らない世界だったので)じゃあ、やってみるか」と軽い気持ちで、大学のサークルではない都内のスポーツクラブを練習場所を選択しました。大学1年の時のことですが、今も変わらず所属しているクラブです。街のスポーツクラブですから、行う種目もランニング種目が主体になります。中学・高校ではリレーのメンバーであったように走ることも好きだったので、ほぼ選択の余地なくスプリント系の種目にチャレンジすることを決めました。

その後ほどなくして、障がい者陸上の全国大会に向けた神

奈川県予選が行われることを知り、せっかくだからとエントリーしてみました。100mに出場したところ、なんとぶっちぎりで優勝することができたんです。すごく嬉しかったですね。その出来事がパラ陸上にのめりこむきっかけになりました。

大学院1年目に パラリンピックに初出場

——そして、多川さんの初めてのパラリンピック出場となった2008年の北京大会は、ご自身が大学院1年生のときでしたね。

多川●その前年、2007年の4月でしたが、大学4年のときに東京で行われた大会に優勝し、当時の日本記録を更新したんですね。これが評価されたこともあって、翌年の北京パラリンピックの日本代表候補に選考されました。

その時点で、自分は就職しようか大学院に進もうかまだ迷っていたのですが、北京パラ出場が現実味を増してくるにしたがって、自分がどういう立場なら気後れすることなく、パラ出場に全力を傾けることができるだろうかを考えました。就職して1年目の夏にパラ出場で長期休暇をとるのは大変だろうなあ、という想像も手伝って「大学院1年生という学生の立場ならまだ、だれに遠慮することなく競技生活を送ることができるだろう」という思いから進学を決意しました。

そんな思いで、出場した北京大会でしたが、外国人選手のレベルの高さ、海外での国際大会独特の雰囲気、想像以上の緊張などが重なって、惨敗という結果に終わってしまいました。しかし、初出場で全力を出し切る難しさを大いに学ぶことができ、とてもいい経験になりました。

——その2年後には、現在お勤めの会社に入社し、社会人として競技を継続する道を選ばれましたね。

多川●大学の理工学部時代の卒論のテーマは「方形量子場に閉じ込められた電子・正孔対の第一原理動力学」というもので、学部～修士課程を通じて「量子力学」をベースにおいた卒業研究や修士論文に取り組みました。勉強も真面目にやり通したので、とても楽しかったですね。



2012 ロンドンパラリンピック 100m 予選 (本人一番手前)



2012 ロンドンパラリンピック 100m 決勝 (本人一番左)

就職にあたっては、技術職ではなく事務職枠で採用されました。仕事と競技生活の両立をめざした生活ですが、職場のみなさんの温かい理解と声援が支えになっています。入社1年目の3月には東日本大震災が起きましたが、その後も競技を継続できていることに本当に感謝しています。大会で活躍した時には、会社にも明るいニュースを届けてくれたと、職場から喜ばれたことも嬉しかったです。

9万人の大観声が選手を後押しする パラ発祥国で最高のレースを経験

——そして2012年には2度目のパラリンピックであるロンドン大会に出場されます。この大会はご自身でも思い出に残る大会だそうですが。

多川●ロンドンでは2つの種目で憧れの舞台の決勝レースを走ることができました。とくに嬉しかったのは100mで5位に入賞できたことですね。世界のすごい選手たちが全力で競い合う決勝レースに出られるだけでも幸せなのに、5位に入賞したのは大きな自信になりました。開催国のイギリスはパラリンピック発祥の国でもあり、そのため国民のパラリンピックに寄せる支持が他国とは比較にならないほど高いです。オリンピックと少しも遜色ない9万人の大観衆の声援が私たち選手をどれだけ盛り上げてくれたことか。

これまでの競技生活の中でも最高の思い出になったレースでした。

——ロンドンの後にも、多川さんの充実した競技生活は続きます。日本記録を次々に更新され、その勢いを2016年のリオデジャネイロ大会まで繋げられました。

多川●2014年6月の日本選手権ではT47の100mで日本記録を更新し、その年の10月には韓国・仁川で行われたアジアパラリンピックのT47・200mでも日本記録を塗り替えることができました。この2つの記録は現在も破られていない。というか、私自身が4年以上も自己ベストを更新できていないという、一方の事実の証明でもあります…。

リオでは100mは全体で9番の記録であったため、決勝



熱心にインタビューに応じて頂きました

に進むことができませんでした。やはり大舞台で自己ベストを出すほどの快走をしないと、結果にはなかなかつながりません。まだまだ成長しなければならない課題が残ったレースでした。

しかし、芦田創選手・佐藤圭太選手・山本篤選手の3人のアスリートと共に出場した4×100mリレーでは、3走を任され、アンカーの山本選手に、うまく継ぐことができたと思います。強豪アメリカが失格になったこともあり、レース後3位に繰り上がり銅メダルを獲得することができました。タイムも日本新記録でしたから、大舞台で結果を残すには自己ベストの走りが欠かせないことを実感しましたね。

リオでの一番の思い出は、帰国後にオリンピックのメダリストのみなさんと一緒に行った銀座での凱旋パレードに自分も参加できたことでした。全く面識のない方から突然声をかけられて励ましをいただくというようなことも、リオ後に初めて体験しました。リオでは初めてパラリンピックの試合が日本で生中継されたこともあって、反響も大きくメダルを獲得ことの価値を再認識することができました。



2013 リヨン世界選手権リレー



2016 リオデジャネイロパラリンピック練習風景



2016 リオデジャネイロパラリンピックで銅メダルを獲得！

東京 2020 大会の種目は 100m 一本 出場し活躍することを大目標に

——さて、仕事との両立を実践していらっしゃる多川さんは、どのような日常生活を送られているのですか？

多川●陸上の練習はもう完全に生活の一部になって何年も経ちますから、とくに両立に苦心するようなことはない日々です。むしろ仕事と陸上以外の時間のリフレッシュをどのように行うか、それが大事になっています。心がけているのは毎朝の早起きです。朝食前にストレッチなどで軽く体を動かすようにすること。休みの日も性格的に家でじっとしているということとはまずありません。必ず出かけていますね。

さらにドーピングにも気を遣っています。現役選手である間は、ドーピング機関への居場所情報の提供や抜き打ち検査への協力など、面倒なことも少なくないですが、これも選手の役割の一つだと自覚しています。

職場では、今年の 7 月から今の部署に配属になりました。弊社はインフラに大きく関与する企業ですから、東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けて、大会組織との協力体制の構築も重要な仕事になってきます。これまでの自分の競技経験を少しでも活かして頑張りたいと思います。

さらに、労組のみなさんからも大きな応援をいただいているので、仕事への使命感は日に日に高まっています。



東京電力労働組合と職場のみなさんが全力で応援！！

——選手として今後の目標を教えてくださいませんか？

多川●もちろん東京 2020 大会への出場と活躍です。陸上を始めて以来、最大の目標と夢ですね。ただ東京大会では、私のクラス(T47)の短距離種目は 100m 一本になりそうです。4×100m リレーも切断クラス単独のレースはなくなり、クラス・性別を超えたユニバーサルリレーのみが実施される予定になっています。車イスの選手や他の障がいの選手が男女 2 人ずつの混合でチームを組むリレーですから、大会直前までの種目の選手がリレーメンバーに入るかわからない形になりそうですが、おそらく男子の T47 がメンバーに入る可能性は低いだろうと思います。そのため照準は 100m 一本になります。



東京 2020 大会への抱負を語っていただきました

東京 2020 大会の前に、来年 11 月にドバイで世界選手権が開催されます。この大会で 4 位以内に入ると東京 2020 大会の出場枠が日本に与えられるので、当面はこの大会が大きなターゲットになってきます。ただ、実は今年の夏前から鼠径部(脚の付け根)を故障したこともあり、今年の成績が芳しくなかったため、10 月にジャカルタで行われたアジアパラリンピックに出場できませんでした。現在は年内の復調をめざして調整する日々が続いていますが、来年は世界選手権を中心に充実したシーズンを送るつもりです。

——最後に、一社会人、日本人として東京 2020 大会に寄せる期待と展望をお聞かせください。

多川●パラリンピックという大きな祭典をきっかけに、障がい者スポーツに対する社会の注目と支援が大会後も継続されること。それが最も大切な目標です。大会がレガシーとなって、障がい者が社会に共生する力強い姿を世界にアピールできることを期待しています。「日本ってスゴいな！」と海外に思ってもらえるような大会運営ができれば最高ですね。

労組に関わる方々のご支持やご声援も大会を支える重要な要素になると思います。ぜひ温かいご協力をお願いします。

私もアスリートとして、出場するだけでなく、夢の舞台で活躍できることをテーマに、今後の一日一日を大切に過ごしていきたいと思っています。